



# 長生き



ヤマダヒフミ

長生きが流行った。人類の間で流行った。それは大流行だった。

科学技術の発達のおかげで、それは可能になった。人類はあらゆる病気や身体的欠損を克服しつつあった。

人類は脳を高性能コンピュータに、そして内蔵を新エネルギーによる内燃機関に、肌を鋼鉄のなめらかな可変金属体へ、神経をマグネタイトの細い糸に変えた。そして随分と長生きするようになった。

それは当初金属の強度のために一万年か二万年程度だったが、やがて「金属生命の常時更新化」という画期的化学作用をブラジル出身のドクトル・マグワリーナが発見し、人類に適用することにより、人類の寿命はさらにさらに伸びた。

それから「永世精神更正」や「魂のアポトーシス回避作用」だとか、長い年月の間で沢山の発見がされて、更に更に更に更に人類の寿命は伸びた。

それはもう先が見えないほどで、みんなもう「死」なんて言葉は忘れていた。「死」というのはやがて廃語となった。一番古い文献(この文献も長持ちする)にもすらそれはもう載っていない。

人類はすさまじく長生きした。途方もなく。

そしてその間、なに一つやらなかった。何せ時は無限にあるのだ。なにも今やる必要はないではないか。

そして気の遠くなるような年月がすぎて、とうとう宇宙の終わりの日がやってきた。

人類は宇宙の終わりの日を知らなかった。それで神様がやってきて知らせることになった。

「おーい、お前ら」

とよぼよぼの爺さんの格好を借りた神は言った。

「宇宙は今日一杯で終わりだ。しまいだ、しまい」

「えー——」

と人類は絶句した。

「私達は死ぬのですか？」

と人類は聞いた。(もちろん、死という言葉はなかったので大変遠回りな言い方を用いて、同じ意味の事を聞いたのだった)

「いや」

と神様は人類に答えた。

「お前達は死なん。・・・何もしなかったからな」

と神は冷酷にも言った。

「もう一回じゃ。もう一回この時を繰り返す。お前らだけな。・・・他のものらはもう全部済んだからの」

「え——————」

と人類は神様にブーイングした。ブーブー。

人類は生きることにはささかウンザリとしていたのだった。